慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「エス」の圏域 : ゲオルク・グロデックの精神風景と社会的影響
Sub Title	Im Banne des "Es" : Georg Groddeck. Ein Fanatiker der Heilkunst und seine soziale Mission
Author	Knaup, Hans-Joachim
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.44 (2008.) ,p.1- 26
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20080930-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「エス」の圏域
――ゲオルク・グロデックの精神風景と社会的影響――

クナウプ　ハンス・ヨアヒム

目次

1.「カリスマ的存在」としての医師を目指して――シュヴェニンガー博士の影響
2. *na*tura *sa*nat, *me*dicus *cu*rat「自然が癒し医師は見守る」――医療規範としての「ナサメク（Nasamecu）」とその人種論への応用
3.「野性的精神分析」と「サタナーリウム」
4. 庭園都市（ガルテンシュタット）の構想と実践――個別医療を越えて
5. 超人としての医師と民族の治癒――グロデックとヒトラー

本論は，総合的なグロデック研究の序論的意味を持つものである。ゲオルク・グロデックは，日本ではフロイト以前に「エス」を導入した精神科医として知られている。この分野に関するグロデックの書物はすでに日本語にも翻訳されている。岸田秀 , 山下公子訳の『エスの本：無意識の探究』[1] はその代表的なものである。同じく翻訳ではあるが，詳細な注釈と解釈を加えた野間俊一の『エスとの対話：心身の無意識と癒し』[2] という書物も刊行されている。いずれの業績も，タイトルから推察されるように

1）岸田秀，山下公子訳の『エスの本：無意識の探究』，誠信書房，東京，1991 年。
2）野間俊一，『エスとの対話：心身の無意識と癒し』，新曜社，東京，2002 年。

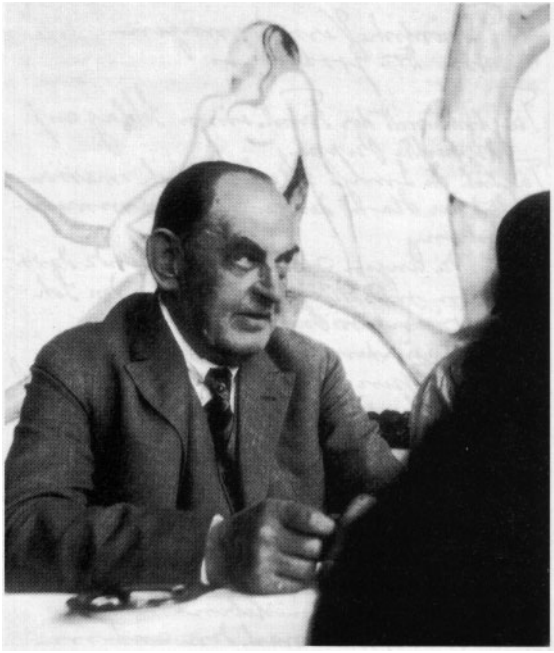
心理分析学者としてのグロデックに焦点を絞ったものである。

グロデック自身の思想には論理的な飛躍が見られたり，論理展開に一貫性を欠くところがあるのは否定できない。また，人種問題や当時の独裁政治との関わりなど，批判的な目で見ると，問題となる部分も多々ある。しかしながら彼の活動を当時の時代的背景の中に置くと，実に興味深い事実が浮かび上がってくるのである。筆者の研究関心は，しばしばフロイトとの対比で語られるグロデックの業績を，心理学という専門領域に限定しないで，当時の精神史・文化史の文脈に戻して，その同時代的問題性を再構成する点にある。グロデックの活動は，医療分野を機軸としながら，例えば庭園都市構想，帰還兵専門のサナトリウム構想，現代の生協の先駆けとなるような協同製造・購買組織の構想，さらに成人教育のシステム化など多様な領域に及んでおり，1910 年代・20 年代における社会改革の実践分野を含んでいる。筆者は，グロデックのこのような広範な活動のそれぞれについての詳細な記述を最終的には目指しているが，本論ではまず，グロデックの活動の概略と，それらの活動の基盤を構成しているグロデックの心的特性の描写に論述を限定したい。

1.「カリスマ的存在」としての医師を目指して
――シュヴェニンガー博士の影響

グロデックの心的特性を考察するために，ここでは彼が医者になることを決断した精神風景をまず紹介し，19 世紀後半から 20 世紀初めにおける医療をめぐる論争のなかでグロデックがどのような道を選択することになるのかを見ていこう。

ゲオルク・グロデックは 1866 年 10 月 13 日ザーレ河畔の保養地ケーゼンに生まれた。グロデック家は，現在ポーランド領となっているダンツィヒの上流階級の一族，祖父はダンツィヒの市長で，父親は医者であった。1878 年グロデックは名門エリート校シュールプフォルタに入学，母方の祖父は当校の校長であった。



資料 1：グロデック博士

シュールプフォルタの独特な伝統的校風はグロデックの知的形成に大きな影響を及ぼしたと考えられる。グロデックの自伝を書いたヴォルフガング・マルティンケヴィチによると，シュールプフォルタの「閉ざされた世界」の中心は「ギリシャ・ローマ，そしてゲーテ・シラー」であり，「すべてがその回りを巡っていた」。シュールプフォルタは，クロップシュトック，フィヒテ，ニーチェ，ランケのような「18・19 世紀ドイツ精神史の偉人」を輩出しており，そのことは後のグロッデクのカリスマ的存在と療法を関連づける独自の医療哲学を生む背景になっていると言えるだろう。

この学校の理念は，専門知識をもったスペシャリストに学生を育てることばかりでなく，人間として普遍的な教養を身につけた真の教養人を養成することであった。シュールプフォルタの教育環境は，プロイセンの士官学校

に類似する多くの点を有していたらしい。このことは，シュールプフォルタの厳しい教育を受けたニーチェの次の記述のなかに反映している――

「軍人と学者を有為な者にするための原理は同じものである。有能な学者で，有能な軍人の本能を身に宿していない者は存在し得ない。列を乱すことはないが，しかし必要な時には突き進む能力と勇気，快適よりは危険を優先する気概，許されることと許されざることを小市民的に計りにかけるようなことはしない大胆さ，それらが共通の原理である。厳格なる学舎（まなびや）で何を学ぶのか？　それは，規範に従順であることと同時に規範に基づく命（めい）を的確に下す力である。」[3)]

知識偏重で用心深い小市民的な在り方を越えるような存在，そのような存在を良しとするこのような校風のなかでグロデックは育ったのである。シュールプフォルタの教育方法は権威主義的なものであり，正義・不正義の基準は教師の恣意的判断に任されており，学生は教師の意志に従わざるを得なかった。学生を規範に従属させる物理的な手段として笞刑も導入され，さらに教師が威嚇して学生を萎縮させるような心理的手段も用いられていた。このような肉体や精神に暴力的圧力を必要に応じて行使することによって，シュールプフォルタの教育は絶対服従を要求したのである。グロデック式療法の特徴はカリスマ性の重視にあるが，その源はシュールプフォルタのこのような教育風土にまで遡ることができるであろう。

さて，1885 年グロデックは父親の薦めでベルリン大学で医学を学び始めた。グロデック自身は，自分の天職は教育者であると感じていたようであるが，父親は次のように言ってグロデックを説得したらしい――

「教師と教育者は規則と秩序の網のなかに捕らわれ，決められたこと

3）Curt Paul Janz: Friedrich Nietzsche, Biographie in drei Bänden, 1.Band, München, Wien 1978, S.127.

に従うだけの低級人種のごとき者であり，まったく自由などはないのだ。これに反して偉大な医者は自由だ。」[4]

父親は，この説得のなかで具体的にエルンスト・シュヴェニンガー博士の名前をしばしば挙げていた。この人物こそがグロデックの進路決定に重要な役割を果たすことになるのである。

グロデックが医学を学び始めた頃，シュヴェニンガー博士をめぐって論争が燃え上がっていた。ビスマルクはシュヴェニンガーをベルリン大学教授にして，ベルリン大学附属慈恵病院（シャリテー）の医長に推挙しようとしていたが，このことが猛烈な反感を呼び起こした。シュヴェニンガーは，肥満とアルコール依存症に苦しむビスマルクを大胆な方法で治療したことがあった。シュヴェニンガーはビスマルクに毎朝8時に起きて，筋トレを行い，鰊（にしん）ダイエットを命じた。ビスマルクが「お主の頭はいかれている！」と激しく非難すると，シュヴェニンガーは「閣下，そのような野蛮なお言葉を吐くようでしたら，閣下にはむしろ獣医のような医者の方がふさわしゅうございませんか！」と言い放ち姿を消したと，伝えられている。ビスマルクは最終的にはシュヴェニンガーの処方を受け入れ，結果として全治することになる。シュヴェニンガーに対するビスマルクの言葉：「余はこれまでの医者どもについては，やつらを意のままに操ってきたが，今初めて，余を操作できる本格的な医者に出会った」。[5]

父親はシュヴェニンガーの話をすることによって，息子に一つの模範的生き方を示そうとしたのである。そして，この手本とすべき事例はグロデックに，医者とは「支配を職業とする者」，「未来を教える教育者」[6] であるという強い印象を残したと言えるであろう。

大学で学ぶうちに，グロデックはこれまでまったく予想もしなかった視

4）Wolfgang Martinkewicz: Georg Groddeck, Eine Biographie, Frankfurt 1997, S.61f.

5）Emil Ludwig: Bismarck: Geschichte eines Kämpfers, Berlin 1927, S. 530f.

6）Georg Groddeck: Ein Kind der Erde. Bd.1, Leipzig 1905, S.185.

点や考え方に出会うことになる。つまりグロデックはシュールプフォルタで古代文化とギリシャ・ラテン語の精神文化圏に生きていたのであるが，今や経験的事実に基づく厳格な科学の世界を前にしたのである。19 世紀後半期の医学は，人文科学から自然科学へのパラディグマの大きな転換期にあり，パリ学派とウィーン学派の影響の下で科学の先端的地位を獲得しつつあった。このことは，医者の社会的評価が急速に向上した点にもはっきり表れている。

しかし自然科学としての医学は，全体として見た場合，当初期待されていた程の成果を実は挙げていなかった。このことは，19 世紀の終わりに感染症の治療が行き詰まりの状況に陥った点にはっきり現れている。顕微鏡など，当時最新の医療機器を駆使することによって感染症は克服できるという夢，そのような夢を与えたのは細菌学であった。細菌学の急速な発展は衛生学を不要なものとする程の勢いであったが，しかし感染症治療の行き詰まりは，自然科学以外の領域をも広く含む総合的な衛生学の復権を生むことになる。

医学の他の分野においても，細菌学と同じような経過を辿るケースが多かった。19 世紀の終わりに，厳格な自然科学的方法を基盤とする医学のパラディグマは全体的な危機に陥ったのである。この危機のなかで再び評価を高めたものは，大学医学部の外部に確立していた医療コンセプトである。自然科学や技術に基盤を置く医学に対する不満は高まっていき，人間の生を一つの全体として見る視点を再度評価する方向に向かうことになる。それは，ワンダーフォーゲルや菜食主義，それに裸体賛美主義などの文化的・カルト的運動が生まれて来ることの中に現れている。自然治癒や日光浴・森林浴の流行なども，生を全体として把握しようとする時代現象の現れと言えるであろう。[7] これらの運動のなかでは，「健全なる者」が理想の規範となり，その規範から個人の進むべき道や，さらには政治の望ましい

7）Uwe Puschner: Die völkische Bewegung im wilhelmimischen Kaiserreich, Sprache - Rasse - Religion, Darmstadt 2001, S.167.

方向性も導かれることになった。医療の分野においても，自然科学を基盤とする医学が危機に陥ったことによって，フロイトや，「クナイプ療法」と言われる水質療法を提唱した神父セバスティアン・クナイプ，そしてさらにシュヴェニンガーのような多彩な人材が生まれてきたのである。

グロデックは 1889 年にベルリン・フンボルト大学において，『皮膚病治療に際してのハイドロキシラミンの用途と効果』[8] というテーマで医学博士の学位を取得している。博士論文終了後，グロデックは 1890 年から，ベルリン・フンボルト大学附属慈恵病院皮膚科主任に就任していたシュヴェニンガー教授の助手になった。シュヴェニンガーは理学療法を率先して取り入れ，薬の処方箋を書くことは殆どなかった。シュヴェニンガーは患者の生活にあたかも独裁者のように介入することを好んだ。シュヴェニンガーの性格は，妥協せず自分の意志を押し通すのに暴力も辞さないほどの荒々しいものであったと言われている。心理分析医のマルティン・グロートヤーンによれば，シュヴェニンガーはビスマルクが唯一言うことを聞く人物であった。

グロデックは医者になるべく修行に精進するが，しかし医学を深く学ぶほどに，これを職業とすることに難しさを感ずるようになっていった。医者や医学についてのグロデックのイメージは，父親が具現していたロマン主義医学の影響を強く受けていた。それは人間の全体性に基づく医学であり，治療法は生命の源を重視する哲学的思考に接近することによって生み出されるという思想である。

グロデックにとって，医者が病気を観察・診断することは，事物の本質を見極めようとする哲学者の試みと同じものであった。医者と哲学者は，その本性から深い絆で結ばれており，同じ観察眼，同じ言語，同じ思考を共有している，とグロデックは考えていた。

1861 年，医師養成課程から哲学の諸科目が消え，それにかわって自然

8）グロデックの博士論文のオリジナルタイトル：„Über das Hydroxylamin und seine Verwendung in der Therapie der Hautkrankheiten.“

科学系の科目群（解剖・生理・植物・動物・物理・化学）が主流になった。つまり自然科学系が哲学系を完全に駆逐したのである。医者の言葉は哲学者の言葉から離れて行った。医者と患者の会話にも，このことは反映することになる。医者は以前，「どうなさいましたか」という患者の全体性に呼びかける問いかけをしていたが，今では即物的・部分的に「どこが悪いのですか」と質問するだけになってしまった，と言われている。

シュヴェニンガーは 35 歳のときにビスマルクの篤い庇護を受け，ベルリン大学の教授及び大学慈恵病院の皮膚科の主任になる。大学教授会のメンバーはこの就任に反対であったが，ビスマルクとの良好な関係がこの人事決定に影響したと言われている。グロデックがシュヴェニンガーの知己を得たとき，シュヴェニンガーは大学のなかで重要な地位に就いていたが，学内では周囲から敬遠され，疎外される環境にあったと言えるであろう。しかしベルリンの社交界では，この知性溢れる問題児は常に会話の中心に存在し，上流人士のなかで人気のある名医として評価されていた。

シュヴェニンガーはグロデックにとって父親のような存在であった。しかしこの新しい父親は亡くなった本当の父親をはるかに凌駕する存在であり，いわば復活して新しい生を得た父親のようであった。すばらしい光彩を放ち，カリスマ的な強大な引力を身に装備しているようなイメージを，グロデックはシュヴェニンガーに感じ取っていた。グロデックは社交界など人前に姿を現すと，必ずシュヴェニンガーを話題にした。しかしそれは，シュヴェニンガーについて語るのではなく，師シュヴェニンガーの語り口を真似ることであり，またシュヴェニンガーの後を追うだけでなく，シュヴェニンガーを完全に模倣し，ついには情熱と過激さの点で師を凌駕しようとするものであった。

医師の「カリスマ性」が治療に有効であるというグロデックの言説は，分業化の進む近代医療の問題点を鋭く突くという点で光彩を放つものであった。しかし，この「カリスマ性」に基づく全人的治療は，その方法論が政治的・社会的現象に適応されると非常に複雑かつ危険を帯びた様相を見

せることになる。

2. *na*tura *sa*nat, *me*dicus *cu*rat「自然が癒し医師は見守る」——医療規範としての「ナサメク（Nasamecu）」とその人種論への応用

アカデミックな医学は 19 世紀終わりに危機に陥ることになるが，そのときシュヴェニンガーは，病気の原因を究明しようとする科学的・実証的医療研究とは異なる方向を目指すことになる。シュヴェニンガーの理論の中心は，病気を引き起こす原因の究明ではなく，病気を患者の全体性から治療する方向にシフトしていくのである。グロデックは，シュヴェニンガーによって生み出されたこの治療法のディスクルスの忠実な継承者になっていく。

グロデックは 1891 年から 1896 年まで，ブランデンブルク市とラーン河畔ヴァイルブルク市で軍医としての勤務に就いた。グロデックは 1897 年，妻と妹のリーナとともにバーデン・バーデンに移住。リーナは当地でペンション『健康と病』を開設した。この施設における医学上の総合的ア

資料 2：バーデン・バーデンにあるグロデック博士のサナトリウム。現在はホテルになっている。（写真 : Michael Weingardt）

ドバイスを，グロデックが担当した。

グロデックは 1900 年，バーデン・バーデンにサナトリウム『マリアの丘』（Sanatorium Groddeck, Villa Marienhöhe）を開設。グロデックは医院長として亡くなるまでこの施設を維持した。グロデックはバーデン・バーデンを世界で最も美しい地と考えていた。自然に恵まれたバーデン・バーデンのすばらしい環境はグロデックにとって理想郷であり，新鮮な空気や澄んだ水それに静寂は保養地としての条件を十分に満たしていた。グロデックは 1909 年から，「バーデン・バーデン教養・討論クラブ」という成人教育施設において，連続講演を始めている。

グロデックは医学や社会問題の仕事に携わるかたわら，文学に対する思いを形にしていこうとした。例えば，1905 年に小説『大地の子』を出版，さらに 1909 年には物語『ランゲヴィーシェの神父』も刊行した。後者は当初，フランクフルト新聞の連載小説として発表されたものであり，職業に対する弾圧を題材にした社会派小説であった。

グロデックは 1909 年に『神の本性への道』というタイトルの講演を行い，さらに 1910 年，「バーデン・バーデン教養・討論クラブ」において『生と死』をテーマにした連続講演も行っている。1913 年には『ナサメク――健康と病の一般入門』をテーマに講演，ナサメクとはラテン語の *na*tura *sa*nat, *me*dicus *cu*rat「自然が癒し医師は見守る」の各単語の最初の二文字 *na*, *sa*, *me*, *cu* を合成した造語である。

グロデックは，自然哲学の世界観や，市民的俗物精神に対する批判の点でゲーテとニーチェから強い影響を受けていた。そのことは，グロデックの心理分析学的・文学的著作『シンボルとしての人間』にはっきりと表現されている。

グロデックは伝記のなかに，「シュールプフォルタの 6 年間は悲しいものであった」[9] という記述を残している。シュールプフォルタに対するネ

9）Georg Groddeck: Der Mensch und sein Es: Briefe, Aufsätze, Biographisches. Hrsg. von Margaretha Honegger, Wiesbaden 1970, S. 305.

ガティブな発言は多く見られるが，しかし肯定的な評価も存在する点に注目すべきであろう。グロデックは後年，「古代風の友情」や「自分を生かす可能性・能力」というテーマを好んで取り上げているが，それらはシュールプフォルタの環境が生み出したものであった。グロデックが特に賞賛しているのは次のような原則である――「宿命にたいして抗わずに従いながら，しかし自由を保持し続けること，この原則を私はシュールプフォルタで学んだ。その後の人生や職業における私の成功は，待つことができる能力，つまり忍耐に負うところが大きい。この忍耐を私はシュールプフォルタで学んだのだが，しかしそれは今なお記憶から消えない苦悩と呻吟のなかで修得したのである」。[10)]

ニーチェの言葉のなかに「アーモア・ファーティ（Amor fati）」という表現があり，それは通常「運命愛」と訳される。グロデックはニーチェのこの言葉に共鳴しているが，それは偶然ではなく，「アーモア・ファーティ」のなかにこそ人間の偉大さが宿っていると解釈されているからである。グロデックは後年ニーチェにしばしば言及し，その際にニーチェも高く評価したギリシャ抒情詩人ピンダーの次のエピグラムを好んで引用している――「本来の定められた存在に本格的に成るべし」。このピンダーの表現様式はゲーテやニーチェによって変容されながら，しかしそのギリシャ的原型を想起させるように用いられた。ゲーテの論文『古代とモデルネ』における有名な表現，「各人それぞれの在り方でギリシャ人の如くであれ，但し本格的に其れであれ！」（Jeder sei auf seine Art ein Grieche, aber er sei`s!）[11)] や，ニーチェの遺稿断章（1875 年）の「古代的（いにしえ）に生きることを試みよ！」（Man versuche　alterthuemlich zu leben）[12)] という表現には，ピン

10）Wolfgang Martinkewicz: a.a.O., S.68.

11）Johann Wolfgang von Goethe: Antik und Modern. In: J.W.Goethe, Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens, Münchener Ausgabe, Bd.11-2, S.501.

12）Friedrich Nietzsche: Nachgelassene Fragmente 1875. In: F.Nietzsche,

ダーの余韻が聞き取れる。グロデックはピンダーのエピグラム「本来の定められた存在に本格的に成るべし」を繰り返し引用しているが，その際にグロデックの耳にはゲーテとニーチェが共鳴していたものと思われる。

グロデックは医療規範として「ナサメク」の概念をかかげ，「自然が癒し医師は見守る」という一貫した姿勢を貫こうとする。グロデックにおいて特徴的なことは，この規範が個人の患者に対する療法において適用されるばかりでなく，個人を越えて人種や民族というレベルでも有効である旨が頻繁に強調されている点である。

1910 年，グロデックは『独逸なる人種と女性』に関する講演を行い，それは後に論文としても発表された。講演の冒頭，「独逸とは未来を約束された言葉である」と主張されている。グロデックによれば，「独逸なる人種」は今だ存在せず，それは培養・育成されねばならない。この「冠たる人種」が生まれるには，培養は一定の条件のもとで遂行されなければならない。グロデックは，「アル中，愚鈍，癲癇，性病の連中，価値低き連中に対して婚姻を禁ずるべし」という提案をしている。この主張は，3 年後に刊行された『ナサメク』でも繰り返され，さらにそこでは安楽死の思想との繋がりも見せている。「冠たる人種」の培養・育成を妨げる問題として，グロデックはさらに，ドイツに流入し人種の純粋性を汚染する「異種人間」についても論じている。国境を閉鎖することができないのであれば，異種人間は「冠たる人種」に服従すべきである，と主張されている

「我が人種の労働者は，ポーランド人，イタリア人，ユダヤ人が簡単に引き受けるような類の仕事を遂行する意志もないし，その能力も持ち合わせていない。我が人種が全体として高度な水準に向かう程に，かくのごとき類の仕事に対する嫌悪と拒絶はますます大きくなるので

Kritische Studienausgabe, Hrsg. von Giorgio Colli u. Mazzino Montinari, Bd.8, S.89.

ある。ドイツ民族の培養に成功することは，さまざまな種族を混ぜ合わせて一つの高貴な人種を生み出すことである。この培養にいつの日か成功した暁には，この人種は自分たちでは出来なくなった仕事を負わせるために，何処かでチャンダラの如き者，つまりプロレタリアートを生み出すことになる。偉大な人種を形成する過程で，高度な特性は他者の犠牲のもとでのみ育成できるものであること，この事実は忘れられてはならない。」[13)]

つまり，グロデックは「人種形成」のプロセスにおいて，「高度な特性は他者の犠牲のもとでのみ育成できる」という現象を「自然の理（ことわり）」と見ているのである。今日の視点から見た場合，個人の医療レベルから直線的に人種論にまで飛躍するグロデックの理論的・思想的欠陥は当然批判されるべきであろう。ただし，このような言説はグロデックに固有なものではなく，1920 年代には少なからず存在したのである。

3.「野性的精神分析」と「サタナーリウム」

グロデックは 1913 年にフロイトの精神分析を知ることになるが，治療について天才的な才能に恵まれていたグロデックは，後に「精神分析的方向性を有する心身医学」の父と言われるようになった。

グロデックが独自の自己分析を取り入れたことは有名である。グロデックは，患者を前に心理分析や心身医学のテーマにして，まったく自由な語り口の講演を行い，その際にいろいろな連想を生み出せるような形で分かり易い自己分析も行ってみせた。

エスの概念を特徴的に用いた最初の人物はグロデックであり（1909 年 7 月に刊行された最初の著書『神的自然に向かって』„Hin zur Gottesnatur“ の中でグロデックはエスの概念を使っている），フロイトはグロデッ

13）Wolfgang Martynkewicz: a.a.O., S.217.

クからこの概念を借用したと言われている。グロデックが再三強調していることであるが，「自我」と名付けられているものは，われわれの生のなかで実は受動的な条件の中に置かれている。つまり，グロデックによれば，われわれは未知の，制御出来ない力（エス）によって生かされているのである。

グロデックの『エスの本――ある女友達への精神分析についての手紙』[14] が刊行されたのが1923年，その同じ年に少し遅れてフロイトの『自我とエス』が出版されている。フロイトがエスを局所論の中に組み込んだことに対してグロデックは納得できず，フロイトに抗議の手紙を書いたが，フロイトからは「口腔の手術」を理由に短い返信があっただけで，釈明はなされなかった。グロデックのエスの発想は，エドワルト・ハルトマンやニーチェの美学や哲学と触れあうなかで生まれたものであり，「一人ひとりの生を全的に司る存在」[15] を表すためのものであった。グロデックは，フロイトによるエスの用い方を知って，自分の構想するエスが歪められた形で使われていると感じたのである。エスをめぐる二人のこの対立は，両者の精神分析に対する考え方や治療法の違いを生むばかりでなく，後に述べる社会観の決定的相違を生んでいくことになる。

グロデックはエーリヒ・フロムやハンガリーの精神分析医シャーンドル・フェレンツィのような改革派の精神分析学者ともコンタクトを持っており，特にフェレンツィとは友人であった。さらに，ヘルマン・カイザーリング伯爵の『智慧院』やベルリンのレッシング大学とも関係を持っていた。1914年第一次世界大戦が始まると，グロデックはホテル「バーディシャ・ホーフ」に臨時に開設された軍事病棟の責任者になった。しかし，軍事病棟管理理事会との医学上の対立を深め，グロデックは1915年に罷免された。この時期に最初の妻エルゼと離婚している。新しい人生の同伴

14）Georg Groddeck: Das Buch vom Es. Psychoanalytische Briefe an eine Freundin, Leipzig 1923.

15）野間俊一：『エスとの対話――心身の無意識と癒し』，S.17

者となったのはエミー・フォン・フォークトであった。

すでに述べたように，グロデックはサナトリウム『マリアの丘』の患者や訪問客のために定期的に講演を行っているが，その間にフロイトの著作にも接したようだ。1917 年のフロイト宛書簡の初めには，次のように書かれている――「貴兄の著作に触れ多くを学ぶことができたことに，まず心よりの御礼と感謝を申し上げます」[16]。1918 年にグロデックは私的雑誌『サタナーリウム』を刊行。これは自費出版の形で 23 号まで続くことになる。第 1 号は 1918 年 2 月 6 日発行，最後の 23 号の日付は 1918 年 7 月 10 日となっている。つまり短期間しか続かなかったようだ。また，グロデックは『サタナーリウム』を「何百何千の多くの読者」のために印刷する計画を持っていたが，それも成功しなかった（30 部程度の発行部数に留まった）。[17] しかし，この雑誌刊行の試みはグロデックの精神風景を再構成する上で需要である。『サタナーリウム』のなかでは，ゲーテ，エッカーマン，ニーチェ，ショーペンハウァー等の人物もよく引用され，専門の精神医療を含めたグロデックの思想世界の広がりが，この雑誌に反映されているのである。

ところで，雑誌の名称がサナトリウムではなく，『サタナーリウム』であるところは注意が必要である。この点についてグロデックは，1918 年 2 月 6 日に刊行された第 1 号の序文のなかで次のように述べている――

> 「この冊子の目的は，人々に，苦痛を遠慮や恥じらいなく大声で訴え出すことによって，その苦痛から解放される機会を提供する点にある。このように叫ぶことのできる唯一の場所は，サタン（悪魔）の棲う地獄の空間であるように思われる。故に私は，この雑誌に『サタナーリウム』という名称を付与した。／悶え苦しんでいる人間の叫びのあい

16）vgl. Wolfgang Martynkewicz: a.a.O., S.246.

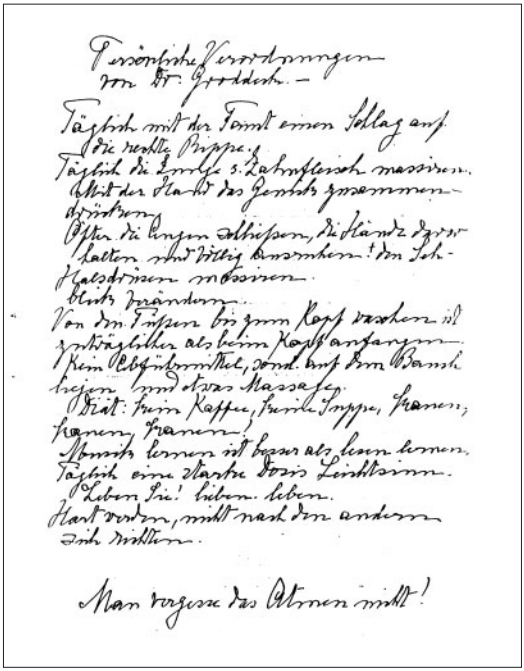
17）Georg Groddeck: Werke, Satanarium. Hrg. Otto Jägersberg, Basel, Frankfurt a.M. 1992, S.277.

だから，サタンの嗤いが鳴り響いている。通常の理解を超えるようなおぞましくひどい話の類は，この嗤いの空間に棲息している。／善悪の彼岸に立つことが私の望みである。善は天上の世界，悪は地獄と思われている。私には天上の世界は満足仕切った人間たちの住む所にしか思えない。私にとっては，その世界は退屈のイメージでしかない。時には私にも口汚く罵ることも許されるべきである。故に私は地獄の方を良とするのである。／サタナーリウムは嘘の支配する所，嘘の王国である。編者は，嘘こそが真実であるという見解に立っている。編者は読者のいかなるファンタジーにも門を開放したい。読者諸氏にお願いしたいのは，この雑誌記事のなかに教養になるとか役に立つとかいうものを求めるのではなく，ただ真実の話を読み込んでほしいということである。なぜなら，サタナーリウムの門の上には，“物分かり良き論理は消えよ”と記されているからである。」[18)]

この記述の最後にグロデックは，「君自身が君の自我を嗤い，君の自我のだらしない飛び跳ね振りを嗤い飛ばすのである」という，ニーチェの有名な言葉を引用し，ニーチェへの親近感を印象付けている。

「サタン（悪魔）の棲う獄の空間」から発せられ，「物分かり良き論理」を鋭く攻撃した言説の具体例を次に見てみよう。グロデックは外国の患者や第一次大戦の負傷兵から，実にさまざまな情報を得ていた。雑誌『サタナーリウム』のなかに，戦争に否定的な記述が見られることはそこに起因している。グロデックは，いつも軍人に接することによって，軍隊の思想や生き方に詳しくなっていた。[19)] 戦争に言及しながら，国家に本質的に内在し，「人間を徹底的に破滅」させる「暴力性」に言及している代表的な箇所を次に紹介しておこう――

18）Georg Groddeck: Werke, Satanarium, S. 15.
19）Georg Groddeck: Werke, Satanarium, S.272.



Persönliche Verordnungen
von Dr. Groddeck. –

Täglich mit der Faust einen Schlag auf
die rechte Rippe.
Täglich die Zunge s. Zahnfleisch massiren.
Mit der Hand das Genick zusammen-
drücken.
Öfter die Augen schliessen, die Hände davor
halten und völlig ausruhen. + den Sch-
Halsdrüsen massiren.
blick verändern.
Von den Füssen bis zum Kopf waschen ist
zuträglicher als beim Kopf anfangen.
Kein Abführmittel, sond. auf dem Bauch
liegen und etwas Massage.
Diät: kein Kaffee, keine Suppe, Kranen,
Kranen, Kranen!
Abnick lernen ist besser als lesen lernen.
Täglich eine starke Dosis Leichtsinn.
Leben Sie! lieben. leben.
Hart werden, nicht nach den andern
sich richten.

Man vergesse das Atmen nicht!

資料 3：グロデック博士のある婦人に宛てた処方（1920 年ごろ）

グロデック博士にいただいた私のための処方

日々拳で右側の肋骨を強く叩くこと
日々舌を歯茎に向けてマッサージすること
手で首筋を掴むように強く押すこと
折に触れて目を閉じ、両手を目に当てて完全に脱力すること
眼球を四方に動かすこと
リンパ腺をマッサージすること
足先から頭頂に向けて身体を擦りながら洗う方が逆よりも健康によろしい
下剤を使用せず、腹ばいになり多少のマッサージを施すこと
節食について：珈琲、スープを避け、繰り返し咀嚼すること
読書するよりも音楽を嗜むべきである
日々いささか過度の浮薄な遊び心を持つこと
生き給え！　愛することで人生を満喫すること
自分を鍛えなさい、自分の思い通りに生ること

呼吸を蔑ろにしてはいけない！

「戦争は重要なものではなくなった。私たちは暴力国家を作る過程に巻き込まれているが，戦争は結局私たちの息の根を止めることになるのだ。国家のために生きるとか，同じことだが祖国のために生きるとかいうのは，人生の誤った目標である。祖国は国家に代わる別の言葉でしかない。国家とは考え出され案出されたものであり，内容のない概念，悪魔の産物である。それは人間を高い頂点へと誘い，束の間のあいだ，あたかも素晴らしいもの全てを自分のものにしたような喜びに浸らせてくれるが，自分の内面にある素晴らしいものを忘れ去った瞬間に，人間を徹底的に破滅させるのである。」[20)]

グロデックのこのような言説には，ニーチェの『反時代的考察』における社会通念や常識的見解を激しく揺さぶる文体の痕跡を認めることができるであろう。グロデックは 1920 年，ハーグの国際精神分析学会に参加している。この参加を勧めたのはフロイトであった。フロイトに対する尊敬の気持ちを十分に持ってはいたものの，同時に競争心も持ち合わせていたグロデックは，学会の夕食会の際に「自分は野性的分析医」であると宣言し，通常の精神分析とは異なる治療法を構想している点を過度に強調しようとした。これまでに引用したさまざまな記述から推察するに，グロデックの言説はその場に居合わせた人々の理解を瞬時に得られるものではなかったであろう。非常に不評であったという記録が残っているが，フロイトが「次回にまた講演をして頂こう」という提案をすることによって，その場はおさまったようである。次回，つまり第 7 回精神分析学会（ベルリンで 1922 年開催）で，グロデックは寄稿した論文の一つ『哲学への逃亡』“Die Flucht in die Philosophie“ を基に講演した。グロデックは当時の精神分析学を構成していた複数のディスクルスのいずれに対しても批判的な距離を取っており，この講演内容の詳細については，その即興性の故に伝

20）Georg Groddeck: Werke, Satanarium, S. 23.

えられていないが，おそらく病的症状について具体的に話を進めながら，途中から人間論や文明論に脈絡なく飛躍していくようなものであったと想像できる。

グロデック自身，その時の講演についてフロイトに宛てて，「はっきりした立場を本来打ち出さねばならないのに，訳の分からない話になってしまい，よく事情に通じている人たちしか理解できないようなものになってしまった」[21] と書いている。グロデックにとってエスは，意識や無意識の外部に存在し，自我を取り囲み支配しているものであり，自我はエスに依存し，エスに操られる俳優の役割を演じるに過ぎない。この文脈から見ると，グロデックは講演などを行っているときに，自分を理性的に制御することを意識的に放棄し，自我（仮面）の働きを「嗤い飛ばす」サタンの遊戯に委ねよう（それはサタナーリウムの構想の実践）としたのかもしれない。いずれにしても，グロデックが公の場で行った講演は評判のよいものではなかった。

4 . 庭園都市（ガルテンシュタット）の構想と実践
――個別医療を越えて

1911 年の夏は雨の降らない猛暑で，そのため食料不足に陥り，それは特に「貧困層」を直撃した。バーデン・バーデンは富裕層の保養地であった。一般市民を救済するために，「バーデン・バーデン生活共同組合」が設立された。共同設立者であるグロデックは 1911 年，「バーデン・バーデン生活協同組合」の管理委員会委員長に就任，その後 21 年間にわたってその職を務めている。「バーデン・バーデン生活協同組合」は複数の店をまず開設，営業を始めた。生活協同組合の思想はこの地域に広まっていくことになる。1919 年には，会員 5000 人，12 店舗を数えるようになった。1912 年，「バーデン・バーデン住宅生活協同組合」が設立された。ここで

21）Wolfgang Martynkewicz: a.a.O., S.290.

もグロデックは設立者の一人となり，亡くなるまで管理委員会委員長を務めたのである。

「バーデン・バーデン住宅生活協同組合」の業績の一つにオースヴィンケル・プロジェクトがある。このプロジェクトとは，バーデン・バーデンのオースヴィンケルに庭園都市を建設する計画であった。1919 年に建設は始められ，1920 年に子沢山の「労働者家族」がこの庭園都市に居住するようになった。路面電車関連の労働者とその家族が多かったと言われている。1921 年には 30 軒の庭園付家屋が完成していた。最後の建設が行われたのは 1935 年。グロデックのコンセプト，つまり家屋の建築は安くしかも健康的であるべきという構想は一貫して維持された。住民が十分な空間を有し，自給的生活も可能な環境に恵まれ，さらに貸し主を恐れることない人間関係，これらの条件は首尾一貫して守られたのである。建築家シュミットヘナーとフェルスポールによって設計された居住区は，今日に至るまで，その特徴と特質を保持している。

しかしここで一つ指摘しておかねばならないが，「貧困層」や「労働者家族」に手を差し伸べる一見薔薇色にしか見えない当時の庭園都市構想の背景には，驚くべきことに，実は人種・民族論が潜んでいたのである。優性民族論の立場から見ると，大都市は「純粋ゲルマン民族」にとって極めて危険な場所であった。ヴィリーバルト・ヘンシェルによれば，都市は「健全な優越民族の墓場」となる可能性があるのである。「優越民族」が次第に追い出され，優位な立場を奪われ，民族混合が進み「純粋性」が失われる。そして，それに伴って回りの環境が大きく変化するという現象が広く見られた。特に大都市の場合，大都市はこの現象を加速させる触媒のような機能を果たす。つまり，大都市は「優越民族」を急速に崩壊させ，その崩壊の過程を促進させるのである。産業と大都市は，民族を絶滅に導く二人の「大量殺人者」である，というメッセージが 1901 年『ドイツ民族時事新報』に寄せられた。執筆者の名前は匿名であり，ゲリラ的な雰囲気を醸し出すように「フランコ・イム・モア」，つまり「泥沼からの解放

者」という名称であった。「優越民族論者」によれば，「大都市の環境と経済」は「金髪の純粋ゲルマン民族」の精神を奪い，その精神を葬る墓場のごときものであった。[22)]

徹底した反資本主義のラディカルな一派は，極端な解決策を求めて行くことになる。例えば，シュタウフの掲げる「民族による生産の理想」構想は，労働を自分たち「優越民族」のみに限定して認めること，「生産」を「消費の枠組み」に制限し，一方「需要」についても「既存の生産のなかで成し得るもの」に留めておくことを求めたのである[23)]。「将来に渡って民族の純粋性・一体性を守り続けること」が，原則的に最高の目標であった。従って，例えば工場労働は「民族に害を及ぼすもの」とみなされた。なぜなら，工場労働は不健康をもたらし，「他に依存しない自主・自立の信念」を奪うからである。

「純粋民族の精神」と昔からのゲルマンの伝統に忠実であろうとするならば，それにふさわしいのは大都市ではなく，むしろ志を同じくする者によって組織された居住区を田園地帯に共に作り上げていくことになる。この運動の模範になったのは，1893 年ベルリン北西部のオラーニエンブルクに造られた果樹園兼住宅地区『エーデン』（楽園）であり，そこでは生活の改革が実行されたのである。

庭園都市運動は，世紀転換期以降にヨーロッパの産業国家の中で急速に広まっていく現象であった。それは，さまざまな形態で展開していた同時代の改革運動に見られるユートピア的な特徴を強く帯びており，産業都市社会の発展に代わる新しい改革のコンセプトを提示するものであった。庭園都市運動は，都市と田園の「統合」を生み出そうとしたのであり，つまり田園地帯の長所と都市のそれを結びつけようとする試みであった。[24)]

22）Uwe Puschner: Die völkische Bewegung im wilhelminischen Kaiserreich. Sprache − Rasse − Religion, Darmstadt 2001, S. 115.

23）Uwe Puschner: a.a.O., S. 155.

24）Uwe Puschner: a.a.O., S.156.

都市が必要となるのは，経済の営みが存在しないと解決できないような課題を人類が持ち続けているからである。しかし，他方で人間は母なる大地である自然との継続的・持続的な接触を求めている。健康な身体を維持し，文明の感染に冒されるようなことがないためには，新鮮な空気と陽光に恵まれた生活を人間は必要としている。大都市と田園地帯のそれぞれの長所が結び付くことによって，個人には自然と理性にかなった生活が保障され，社会全体からも民族の内面の力から持続的に生まれる文化が消えることなく存続することになるのである。[25)]

地方都市や大都市郊外の高級住宅地では，このような要請を実現できない。「この理想が完璧に実現できる」には，「現代の生活と精神によって生み出される新しい構想」が不可欠である。その構想の提案者はハインリッヒ・ハルトであった。ハルトは，世紀転換期にベルリン・シュラハテン湖地区で『新共同体』という生活と文化を改革するためのマニフェストを発表した。それは，『ドイツ庭園都市協会』が刊行したビラに掲載された。『ドイツ庭園都市協会』は 1902 年に設立され，1910 年には会員数 1000 名を数える組織になった。この組織は，主としてドイツ帝国の南部と西部に展開しているおおよそ 10 以上の数の住宅協同組合を関連機関として持っていたが，しかし基本的にはプロパガンダを中心にした「宣伝組織」であった。

庭園都市は住宅問題と社会問題を解決する一つの試みであった。この試みの源泉は「エーデン」をモデルケースとして設置された居住共同体に遡り，田園と都市の調和を求め，それに憧れて逃避しようとする人々の存在を想定して始められたものであった。しかし，本来，庭園都市の構想自体はそれを越えるものであった。その根底にはユートピアのビジョンが存在し，このモデルからすべての生活領域に豊かな実りと繁栄をもたらし，「社会・経済・文化にまたがる包括的な改革」と結びつくことが期待され

25）Uwe Puschner: a.a.O., S.157.

ていたのである。

グロデックが深く関わっているバーデン・バーデンのオースヴィンケル・プロジェクトも，このようなユートピア・ビジョンを継承した試みであった。しかし，すでに指摘したように，このビジョンは「優越民族」の「健全性」を都市化の進行のなかでどのように維持するのかという言説にも注意を向けなければならない。オースヴィンケル・プロジェクトの設立者の一人であるグロデックにとって，このプロジェクトの最大の目標は「民族の健康と維持」であった。ヴィリーバルト・ヘンシェル等によって確立されたディスクルス上にグロデックの構想は展開しており，「民族混合」の進展によって冒される「民族の純粋性」を守ること，つまり「民族の衛生学」の実践を目指していた，ルネサンス的な楽園を提供することによって，大衆性や時代の頽廃に冒されることない理想的人間を培養するという，個別医療のコンセプトを越えたところにオースヴィンケル・プロジェクトは構想され実践されたのである。

5．超人としての医師と民族の治癒――グロデックとヒトラー

エルンスト・ジンメルはグロデックを「医術の狂信者（Fanatiker der Heilkunst）」と名付けた。[26]「狂信者（Fanatiker）」とは，語源的には神に取り憑かれた人のことであり，ある種の信仰や救済の教えに熱中し正気を失っている人のことである。グロデックにとって，医術と宗教的救済は密接に関連しており，境界はあいまいであった。この傾向は特に，医者を理想化する点に現れている。医者は患者が求めるべき救済を具現している存在なのである。

医者は超人としてのみ，病んでいる身体を治癒し得るのである。1933年1月に権力を掌握した人物は，同じように救済への狂信に駆り立てられ，第1次世界大戦で敗北し傷ついたドイツ帝国の再建を志した。ヒトラーの

26）Wolfgang Martynkewicz: a.a.O., S.347.

登場である。ヒトラーは自分に課された任務を，第1次世界大戦によってドイツ民族の身体が蒙った深い傷を治癒することに見ていたのである。このような背景から眺めると，ヒトラーはグロデックにとっていわば同僚のごときものであった。つまり，グロデックは一人一人の人間の身体を対象にしているのにたいして，ヒトラーは「民族の身体の治癒」を目指している。グロデックはヒトラーのなかに，医者の優れた特性をすべて具現している人類の医師を夢見た。優れた医者の特性とは，人間としての深み，包容力，自然に本能的に人間として患者に接することができる能力などである。グロデックはある演説のなかで次のように述べている――「かくのごとき人間は，単に信仰を抱いている水準にあるのではなく，神に満たされているので，全てを神に委ねざるを得ないような信仰の中に存在しているのである」。[27)]

グロデックはこのように「導きの人」ヒトラーを神格化し，完全無欠な並び無き存在として評価し，礼賛しているが，一方ナチ党員たちに対してはグロデックはやや懐疑的であったようだ。グロデックのほうは可能なかぎり，ナチ党員を受け入れ協力しようとした痕跡がある。例えば1933年7月，グロデックはサナトリウム「マリアの丘」での会食に数名のナチ党員を招待している。グロデックはこのナチ党員を持てなすために特別の配慮を惜しまなかった。ミヒァエル・ピヒラーは回想録のなかで，グロデックはナチ党員のあいだで尊敬すべき人物とみなされていたという記述を残している。しかし，このピヒラーの発言には疑わしいところが少なからずある。[28)] ナチ党員の側はグロデックの立場を尊重する意向を当初から持っていなかったようだ。このことは，1933年9月15日の住宅建設協会の会議で，グロデックが議長を解任され，また同志であったカール・フェルスポールも激しく批判された点に表れている。ただし，この解任劇の原因は政治的なものではなく，協会の事務処理上の問題であったようだ。ナチ

27）（1933年9月15日住宅建設協会でのお別れスピーチ）

28）Wolfgang Martynkewicz: a.a.O., S.348.

党の側で住宅建築協会の監査をやり直し，協会の会計処理の不正に関する報告書を提出したのである。この一事からも分かるように，ナチ党員のグロデックに対する姿勢は，グロデックのヒトラーに対する崇拝的な感情に比べると，全く冷めたものであった。

しかし，グロデックはナチ党員の運動に再度参加できる道を模索し，新しいアイディアによって貢献しようとする。10 月 31 日には，グロデックはサナトリウムを翌年の春まで一時閉鎖している。この時期にグロデックは人間の臓器と心霊領域との関係について記述し，さらに癌の問題についても取り組んでいる。グロデックは癌に関する自分の見解を，「導きの人」ヒトラーに上申したいと常に考えていた。グロデックは，人類を癌から解放できるなどとは考えておらず，そのような妄想に陥ることはなかった。グロデックは人類を癌から解放しようとしたのではなく，癌に対する不安を取り除こうとしたのである。この不安の中にグロデックは癌問題の本質を見ていた。人間の身体を蝕んでいるのは癌に対する不安である，とグロデックは考えた。グロデックによれば，ヒトラーが目指していたのは時代に対する不安を除去することであり，癌に対する不安除去の処方は，「民族の身体の治癒」を目指すカリスマ的医師・先導者ヒトラーに役立つはずであった。

グロデックは，ヒトラーがいつの日か自分の医療哲学を評価し個人的に訪ねてくることを夢見ていた。1934 年 3 月 2 日にレニー・リーフェンシュタール監督の映画『意志の勝利』が上演された。この映画はナチの第 5 回党大会の模様を映像化したものであり，大衆を一つの有機体に統括して行く先導者ヒトラーの能力を余すところ無く描写し，当時大きな反響を呼んだ。グロデックは友人達に，この映画を見るように強く奨めていたようである。

グロデックのエスの概念を精神分析学のなかに本格的に導入したフロイトが，ナチズムに対してどのような立場を取ったのかは今なお論争の対象になっている。例えば，フロイトの弟子であるヴィルヘルム・ライヒに対

するフロイトの姿勢。ライヒは1930年にドイツ共産党に入党し，著作や演説を通して激しくナチを批判した。そのライヒを国際精神分析学会から追放したのはフロイトであった。歴史家のなかには，フロイトのこの行動をナチに迎合するものと解釈する流れがあるが，単に学問上の意見相違にすぎないのではないかという見解もあり，依然として未解決の問題であり続けている。いずれにしてもフロイトは1938年にイギリスに亡命した。

一方グロデックは，いつの日かヒトラーが自分を訪ねて来るものと期待しながら，次第に精神錯乱に陥って行くことになる。このカリスマ性に溢れた「野性的」かつ「狂信的」な医師はスイスの精神分析学会で講演したのを最後に，1934年6月11日にチューリッヒにあるクノーナウ城のサナトリウムで没している。